

するとどこからか、シクシク泣く声が聞こえてきた。『マナ』は「ソクソク」と何やら背筋に寒気を感じた。すると『のら』が、「そっ言ええ、奥の部屋に、もう一つ開かないドアがあるの」と言っつて、指差した。

三人はその扉の前に立った。よく聞くと、泣き声はその扉の中からしてきていた。『タンゴ』が扉に向かい、『カナナ』と再び叫ぶと、その泣き声は止んだ。『タンゴ』がドアに近づき、ドアを開けようとしたが、『タンゴ』は何故か、そのドアの取っ手を掴むことが出来なかった。『のら』が手伝い引つ張ったが、『のら』の力ではどうしても開かない。『マナ』、『マナ』引つ張つてと『のら』が叫ぶ。しかし『マナ』はいつも気が進まなかった。しかしこのままにもして置けず、『マナ』も手伝うことにした。「せーの」「マナ」の掛け声とともに、ドアは壁から外れた。中を『のら』が覗いて、首をかき上げている。誰も居ないみたい。そんな訳ないだろと言っつて、『マナ』も覗こうとしたが、「ゴッソ」という音をさせ、頭を入り口にぶつけた。その痛がっている横を、『タンゴ』が揺ら揺らと中に入つて行った。暫くして、『タンゴ』と同じように、真っ黒で目が光っている女の子が、『タンゴ』とともに出て来た。『タンゴ』とは一箇所異なり、髪を部分的に束ねたりボンが赤くなつていて、少しオシャレに見えた。

二人は『のら』と『マナ』にお辞儀をして、揺ら揺らと部屋の中に戻つていった。『マナ』はふと我に返り、「ちょっと待て、この家は今俺の物なの、勝手に中に戻るな」と言つた。しかし二人は中から出て来なかった。

